

「耳の聞えない子どもに、どうしてことばを習得させたらよいのでしょうか。この本はこうした問いに答えるために書かれたものです。」と著者は序文に述べている。

実際、この本は、耳のかわりに目と手を使ってことばを習得させる過程が、きわめて系統的に具体的に説かれている。

この本は、全編が六章から分かれており、第一章 感覚訓練、第二章 読話の指導、第三章 発語の指導、第四章 聴能訓練、第五章 言語指導の目的と方法、第六章 教育の条件、となっている。

このうち、どの章を読んでみても、きわめて明確に指導の目的と内容と方法と段階が示されており、聾教育を、私たち門外漢の判断の内側にまで持ち来たったことに対してその労を多とすべきである。

しいて難をいえば、第六章を始め持って来たほうが、読者が入りやすかったであろう。

またアート紙を使用してあるにしては写真が小さく、不鮮明であることは、この種の本としてはもっと考慮されてよいと思われた。

しかし、ろう児の教育が著者の説くように、「幼児がろうと判ったその瞬間から、たとえ幼児が生まれた直後であろうとも、始めらるべき不可欠の条件」であり、この

—— 書 評 ——

松 沢 豪 著

「ろう幼児とことばの指導」

村 山 貞 雄

書がそうした不幸な子を持つ親に拠りどころを与えることは間違いない。

この本を読むと、(教育という営みは本来そういう性質のものであろうが) ろう児

の教育がいかに忍耐と根気を要する困難な仕事であるかを教えられる。と同時に、わが国に聾教育が開始されてから約九十年の歴史を持つというのに、ろう幼児教育のこの種の本では、本書が最初で唯一のものであるということほどに解釈すべきであろうか。この本がろう幼児をもつ多くの親の拠りどころとなることに加えて、ろう幼児の特殊教育に対する社会の理解と研究の向上の出発点になることを祈る。

序文に山下俊郎氏が記されていることばに同感し、私もそのまま本書の推薦のことばとしたい。

「わたしたちはろう児に対してわたしたちの持てる最良のものである所の松沢さんの教育技術を贈ることによって大人としての義務を果たすことができることを深く心から喜びたい。わたしはこの書が世のすべてにろう児とその親たちの上に明るい光を投げかけるものであることを信じている。」

耳とことばの不自由な子の会 発行

一〇〇〇円

東京都新宿区市ヶ谷台町八